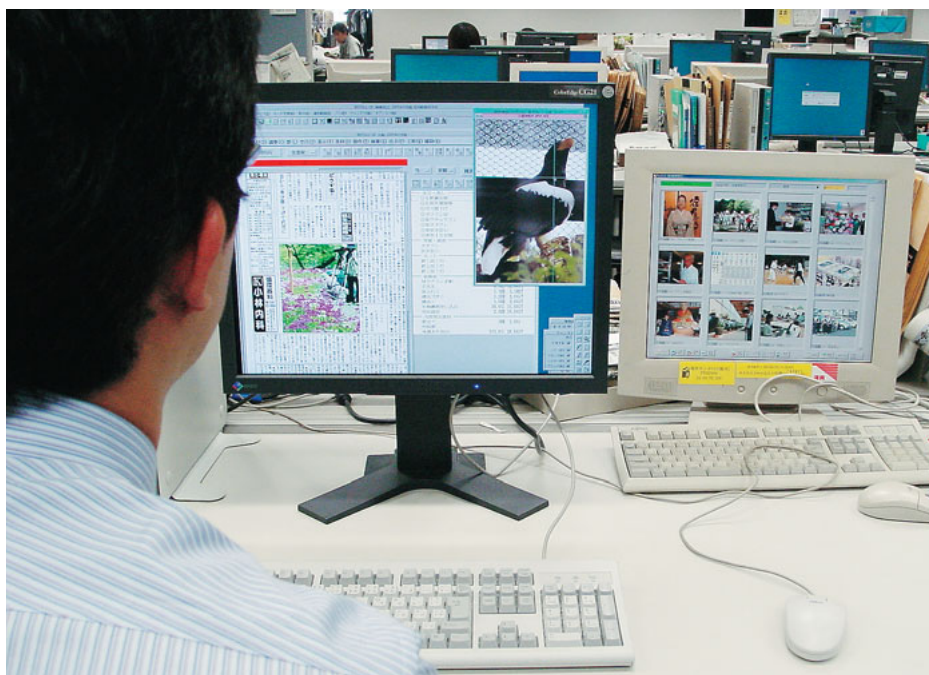


読売新聞社 様

組版の段階で印刷後の色をシミュレーションし、業務の効率化を図りたい。 高い色再現性を求めるから、表示機にはColorEdgeを選択。

時間を争う新聞制作のワークフローの中で、できるだけロスタイムを減らしながら、画像も含めて品質の高い紙面を作りたい。そう考える読売新聞社では、制作工程におけるトータルのカラーマネジメントと、業務の効率化を目指したリニューアルを進めている。同社では、ColorEdge CG21が組版工程の表示端末として採用されている。



制作工程全体を通しての 徹底したカラーマネジメントを目指す

新聞は短い時間で大量の印刷が必要となるため、複数の印刷工場に印刷を任せている。同社ではその各工場での色を統一するべく、印刷機のキャリブレーションを行い、さらに色見本出力用のプリンターへ印刷機のプロファイルを反映させることにより印刷基準を作成。各工場での基準に合わせて印刷機を調整することで、ばらつきをなくしている。今後はこれに加えて入力・編集工程側のカラーマネジメントも徹底して行い、制作工程全体としてのカラーマネジメントを実現したいと、現在システムのリニューアルを進めているところだ。

組版端末モニター上で、全体の色のバランス までチェックしたいというニーズ

以前のシステムの組版工程では、より早く組み上げなければならないという新聞の性質上、またシステムの制約上、カラー画像（多値画像）ではなく、レイアウト用にモノクロ表示画像（二値画像）を作成し、画面上でレイアウト作業を行っていた。しかしこれでは画像の色やレイアウト全体のバランスなどは出力（印刷）を行うまで確認できないという不便さがあった。その後、システムの改善により組版の段階でもカラー画像を使用してレイアウト作業ができるようになった。しかしここでもモニター上で印刷後の状態をシミュレーションして表示することはできず、最終的

にはプリンターでの出力を行い、色の確認をする必要があった。これに対し、カラー面の増ページによるカラー画像の多用化に伴い、次第に組版端末のモニター上で全体のレイアウトを含めた「色」をチェックしたい、印刷紙面上の色をシミュレーションしたい、というニーズが出てきた。



**「正しく伝わる」写真であるかどうか
早い段階で判断する**

「新聞用の写真画像で重要なのは、『伝わる』写真であるかどうかです」と同社技術一部の地主氏は話す。カメラマンが撮影してきたままの写真が使えれば確かにリアルであるが、果たしてそのまま新聞紙面に掲載されたときに本当に「正しく伝わる」写真になるのかどうかを判断する必要がある。基本的には記者が撮影してきた写真画像は自動補正処理されるが、必要に応じて画像の明暗や色の調子などを専門部門で的確に調整することが必要となる。調整された画像はデータ管理サーバに格納され、それを組版端末で取り出し、レイアウト作業を行う。その後で全体をチェックするには現時点ではプリントアウトしなければならないが、この段階で「正しく伝わらない」と判断されれば、画像の再調整や別画像への差し替えが必要になり、また前工程に戻らなければならないことになる。

しかし組版の段階で、モニター上でレイアウト全体を含めた色のバランスや、画像自体の色をチェックすることができるようになれば、プリントアウトをしなくとも画像の修正や調整の必要性を判断でき、またその場で画像加工も行なえるため、ロスタイムが少なくなる。



技術一部 地主氏

そこで同社では、将来的には組版と画像加工を同じ端末で同時に行えることを目指し、組版システムにカラーマネージメントを導入し、さらにシステムを改善していくことになった。

**キャリブレーションに対応した
液晶モニターを探していた**

このようなシステムの改善がなされると、全体のバランスや「色」を判断する重要なインターフェースとなるモニターには、ますます高い色再現性能およびカラーマネージメント機能が必要となる。こうして同社では改めてモニターを選定することになった。

現在、デスク上には、組版用のモニターと画像閲覧用のモニターの2台を設置している。モニターの大画面化、導入されるモニターの数が大量であるなどの理由から、省スペース性を重視して液晶モニターを導入することにした。さらに組版端末のモニターとしては、正しい色を再現できる性能を持つこと、精度の高いカラーマネージメントが行えることが条件となる。この条件のもと選定を行った結果、高い色再現性能を持ち、キャリブレーションに対応したColorEdgeを選定するに至った。

**記事、見出し、そして写真全体として
高品質な新聞を作りたい**

地主氏は、「記事、写真、見出しや絵解きも含めて、全体として高品質なものを作りたい」と語る。「新聞は時間を争う業務であるからこそカラーの素材についてもできるだけ早い段階で、すなわちレイアウト工程でチェックしたい。レイアウトをしてみて、出力してみると、見出しや絵解きでの色表現が写真内容と合っていないこともある。また、カラーで撮った写真がモノクロ掲載として使用されることもある。そういうものを早い段階でチェックし、対応することで、品質の向上を図っていきたいと考えています。」(地主氏)

最終的には、同社独自の印刷色に合わせ、さらに印刷工程までに行われるCMYKへの変換処理や、新聞印刷されたときに最終的に色が良くなるような画像調整を反映した印刷後の状態を組版工程でColorEdge上に表示させ、出来上がり状態を見ながら組版を効率的に進められるようにすることが目標である。

読売新聞社

1874年(明治7年)「日就社」として読売新聞を創刊。1917年(大正6年)に「読売新聞社」となり、現在では世界一の発行部数を誇る日本を代表する新聞の1つである。記事内容はもちろん、新聞品質にもこだわりをもち、1200dpiの画像を用いて新聞画像の品質の向上にも努めている。




導入製品 ColorEdge CG21

製品に関する情報についてはEIZOホームページで

<http://www.eizo.co.jp>

■製品に関するお問い合わせは 受付時間 月～金 9:30～18:00 (祝祭日、弊社休業日を除く)

EIZOコンタクトセンター  0120-956-812